

『ぶら』

作者 浅羽 一

「ねえ、ぶどうが食べたいな」

明るい陽光に照らされる部屋で、彼女は子供みたいな笑顔で言った。

美しい人だと思った。だからこそ、時折、無性にやるせなくなつた。もしも、後ほんの少しだけ世界が互いに優しくければ、きっと彼女は他のどんな人よりも幸せになれたはずなのに。

「…聞いているの？」

「ああ、聞いているよ」

ベッドの上で身を起こし、ちょっとだけ不満そうな彼女に、大丈夫だよと言う風に応えてから、持っていた「ぶどう」を一つ、差し出した。

「皮をむいて」

「そうだね、ごめん、ごめん」

今度は一転して甘えた顔になる。それはたまらなく愛らしくて、彼女が美しいのも当然だと思った。なぜなら、彼女は誰よりも純粋なからだから。

薄紫色のビニールでくるまれたあめ玉は、淡い緑でまん丸だった。

「はい、どうぞ」

決してあめ玉に触れないように、ビニールをつまんで彼女の口へと直接に運ぶ。桃色と言うよりも白に近い小さな舌が、あめ玉の重みでかすかに揺れた。

「あま〜い」

途端に嬉しそうな声を上げた彼女は、左右のほっぺたを交互に膨らませながら、口の中でころころとあめ玉を転がした。

小さなあめ玉一つすら噛み砕く力の無い彼女にとって、それが溶けて消えてしまうまでの、ほんの僅かな時間が、一日の中で最も幸せな時だった。

ころころ、からころ、あめ玉が歯に当たる音が響く。

それを聞きながら、果たして真実とは何であるのだろうかと考えた。

紫外線を完全に遮断するはめ殺しの窓ガラス、空気さえ分子単位で滅菌された室内、テレビもラジオも無く、枕元にあるのは、自然にあるものを何一つとして受け付けない彼女の為に用意された錠剤と点滴のパック。そして、何度も読み返されてぼろぼろになった古い絵本。題名は「くだものがいっぱい」。

心なしか、彼女の頬の膨らみが小さくなっている。おそらく、後ほんの少しの時を経て彼女の今日の楽しみが終わる。あめ玉の音が、先ほどまでよりもゆっくり、小さくなっていく。彼女の大好きな「ぶどう」が溶けて、消えていく。

知らないのだ、彼女は何も。幼児向けの絵本の中で彼女を見つけ、憧れた「ぶどう」は、そんな紛い物よりももっと柔らかくて、瑞々しくて、良い香りもして、それから「種」を持つことを。かつて、世界にはもっと他にも沢山の「くだもの」があったことを。そして、今、自身の前にいる、相手の正体さえも。頭から爪先までをすっぽりと覆う防護服の下にある腕の色を、血液の代わりに流れているオイルの匂いを、彼女はこの先もずっと知ることはない。

「あ〜、美味しかった〜」

「良かったね」

満面の笑みを浮かべる彼女の口元が僅かに涎で光っていて、まっさらのガーゼでそつと

ぬぐってやる。深く刻まれた皺の上をガーゼが撫でる感触に、目を瞑った彼女がくすぐったような声を漏らした。色を失った細い髪が、はらりと防護服の上に落ちてきた。

「お腹一杯になったから、ちよつと寝たい」

「そうだね。それじゃあ、少しお昼寝をしよう」

応えながら、ゆつくりと体を横たえていく彼女の背中を支えてやる。防護服越しに骨の形がありありと伝わってくる。やがて目を閉じた彼女の顔は、やはりとても美しかった。真実など、この無垢な存在の前では何の価値もないと思った。生身の体では一歩たりとも進むことの出来ない無人の世界など、どれだけ広かろうが所詮はこの部屋と比べるまでもない。

「お休みなさい」

眠る寸前、ぽつりと彼女が呟いた。目を瞑ったままで、だけど、あたかもこちらの姿を見えているかのように。だから彼女が完全に眠るまで、この場から離れないと決めた。

知らなくて良いのだ、彼女は何も。なぜなら「不幸」を知らない限り、彼女は永遠に穏やかなままでいられるのだから。

「ゆつくりと、お休み」

一度だけ優しく頭を撫でてやると、とても気持ちよさそうな息が漏れて。また一本、彼女の髪が音もなく落ちた。

〈了〉